

英語派生名詞句における決定詞の分布について

増富，和浩
九州大学大学院人文科学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/6790824>

出版情報：九大英文学．48，pp.109-123，2005．九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：



英語派生名詞句における決定詞の分布について

増富 和浩

1. はじめに

一般に、動詞由来の派生名詞句は「過程名詞」(事象解釈を表す)と「結果名詞」(結果・状態の解釈を表す)とに区別され、これらの名詞句は、統語的なふるまいに関して様々な違いを示すことが(主に記述的に)指摘されている。冠詞や指示代名詞などの決定詞との共起についても、結果名詞よりも過程名詞の方がより制限されることが指摘されている。しかしながら、派生名詞句における決定詞の分布に関する理論的分析はほとんどなされていないのが現状である。本論文では、ミニマリスト・プログラム(cf. Chomsky (2000, 2001))において仮定されている Agree (形式素性の照合操作)の観点から、派生名詞句内部での ϕ 素性の照合過程を議論することで、派生名詞句と決定詞との共起に関わる文法性が正しく予測できることを示す。

2. 事実と問題

派生名詞は *picture* のような普通名詞と同様に、冠詞や指示代名詞などの決定詞との共起が可能である：

- (1) a. John saw the/a/that picture of Mary.
- b. They studied the/an/that *assignment*.

また、普通名詞と同様に、派生名詞は複数形を持ち、その場合も決定詞との共起が可能である：

(2) a. John saw the/those pictures of Mary.

b. They studied the/those *assignments*.

しかしながら、決定詞の分布に関して、このような派生名詞と普通名詞との並行性が常に保たれるわけではない：

(3) a. They observed the/*an/*that *assignment* of the problem.

b. *The *assignments* of the problems took a long time.

上述の(1)や(2)の場合とは異なり、(3a)では *assignment* と不定冠詞および指示代名詞との共起が許されず、(3b)の環境では複数形が許されない。

さらに、派生名詞には、単数形であるにも関わらず、普通名詞の場合とは異なり、決定詞を伴わない(4c)のような例が容認される場合がある：

(4) a. *John saw picture of Mary. (普通名詞)

b. *They studied *assignment*. (派生名詞)

c. *Assignment* of difficult problems always causes problems.

(派生名詞)

以上のような事実を考慮すると、派生名詞と決定詞の共起を統一的に説明することは困難であると考えられる。

3. 先行研究

前節で指摘したような派生名詞句における決定詞の分布に関して、Grimshaw (1990)は、派生名詞句の主要部となる名詞（前節の例では *assignment*）の特性の観点から説明しようとしている。問題となる例を(5)に繰り返して示す：

(5) a. They studied the/an/that *assignment*. (= (1b))

b. They studied the/those *assignments*. (= (2b))

- c. * They studied *assignment*. (= (4b))
- d. They observed the/*an/*that *assignment* of the problem. (= (3a))
- e. *The *assignments* of the problems took a long time. (= (3b))
- f. *Assignment* of difficult problems always causes problems. (= (4c))

Grimshaw によれば、決定詞との共起が自由であり、複数形を許す(5a, b)の場合は、派生名詞句の主要部 (*assignment*) が結果名詞であると主張する。つまり、結果名詞は加算名詞としてふるまうことが可能であるため、「数」の解釈を含意する *an/that/those* など決定詞との共起が可能であり、複数形を持つことが可能であると考えられる。また、単数形の加算名詞は決定詞を伴わないと非文法的となるという名詞の一般的特性により、(5c)が許されないことが説明される。

これとは対照的に、Grimshaw の分析では、(5d)から(5f)の場合は、派生名詞句の主要部 (*assignment*) が過程名詞であり、不加算名詞としての解釈を受けるため、*the* 以外の決定詞との共起が許されず、複数形を持たない反面、決定詞を伴わない単数形が可能であると考えられる。しかし、このような分析は直感的には正しいものの、問題となる共起のメカニズムそのものを明らかにしているとは言えない。

一方、Karimi (1999)や大庭 (2005)が提案するような名詞句内部における決定詞の生起位置の違いを提案した理論が、(5)のような対比を説明できる可能性もある。

- (6) [_{DP} Bill's/the/that/each ... D [_{NP} a/one/many ... N ...]] (大庭 (2005))

これらの提案では、決定詞の種類により、その規定生成位置が DP 内部と NP 内部とに区別され、(7)のような対比に対して説明力を持つ：

- (7) a. Bill's many pictures
- b. *Bill's each picture

しかしながら、このような分析を採用したとしても、(5)のような対比を説明するためには、再び、N が結果名詞の場合には NP 内部に a などの決定詞が生起し、N が過程名詞の場合には DP 内部に the などの決定詞が生起するという主要部 N の種類の区別に依存した記述的な説明をする必要がある。

以上のように、Grimshaw (1990)の分析や、Karimi (1999)や大庭 (2005)のような提案を採用したとしても、(5)に示したような対比に対して十分な説明を与えることはできない。

4. 分 析

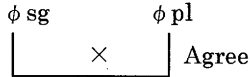
本論文では、前節までに指摘した派生名詞句内部での決定詞の分布に関して、ミニマリスト・プログラムの素性照合操作 (Agree) の観点から、決定詞と主要部名詞が持つ ϕ 素性の照合過程を議論することで、原理的な説明を提案する。

4. 1. 名詞句内部での Agree

ミニマリスト・プログラムにおいては、例えば、名詞句 (主語) とその外部にある T(ense)との一致現象を説明する手段として Agree が仮定されているが、この節では、名詞句 (DP) 内部での決定詞と NP の主要部との一致現象について議論することとする。

a picture/*pictures のような名詞句に関する基本的な事実に注目すると、a などの決定詞 (DP の主要部) と NP の主要部名詞との間には何らかの照合関係があると考えられる。ミニマリスト・プログラムにおいて、DP の主要部 D と NP (の主要部 N) に一般的に仮定される形式素性は ϕ 素性であり、両者の間に仮定される照合操作は Agree であると考えられる。従って、Agree の観点から言えば、(8)に示すように、* a pictures のような場合は、D と N が持つ ϕ 素性 (特に、「数」に関する素性) が一致していないために非文法的であると説明することができると考えられる。(なお、sg と pl は ϕ 素性の集合のうち、「数」に関わる素性がそれぞれ「単数」と「複数」であること示すものとする。)

(8) * $[_{DP} \text{ a } [_{NP} \text{ pictures }]]$



ただし、ここではこのような説明についてさらに詳細に検討してみることにする。Chomsky (2001)に従えば、Agree が成立するのは Probe と Goal (現在の例においては、Probe = a, Goal = pictures) がともに active (=解釈不可能素性を持つ) な場合であるが、その前提となるのは、両者の間に Matching (適合関係) が成立していることである。Chomsky (2000)によれば、「Matching が成立する」とは Probe の持つ素性と Goal の持つ素性との間に同一性が保証されているということである：

(9) Matching is feature identity.

(Chomsky (2001: 122))

本論文では、(8)のような事実を説明するためには、従来の仮定よりも ϕ 素性についての指定を厳密にすることが必要であると提案する。つまり、(8)においては、a と pictures の持つ ϕ 素性はそれぞれ次のようであると考える。¹

(10) a. $[_D \text{ a}]$ は解釈不可能な $\phi \text{ sg}$ を持つ。

b. $[_N \text{ pictures}]$ は解釈不可能な $\phi \text{ pl}$ を持つ。

Probe と Goal がそれぞれ(10a, b)のような素性を持つとすると、 $\phi \text{ sg}$ と $\phi \text{ pl}$ は(従来の分析よりも厳密な意味で)同一ではなく、Matching が成立しないと考えられる。従って、(8)のような場合は、a と pictures との Agree が成立せず、解釈不可能な ϕ 素性が削除されないため、非文法的であると説明できる。²

以下では、このような分析に基づいて(5a)から(5f)の対比について具体的に議論することにする。

4. 2. 派生名詞句と不定冠詞・指示代名詞との共起

(5a, d)で示したように、assignment のような派生名詞は、an や that との共起が可能な場合と不可能な場合とがあるが、まず、(11a)が文法的である理由について議論することにする。

(11) a. They studied an/that assignment. (cf. (5a))

b. *They observed an/that assignment of the problem. (cf. (5d))

一般に、assignment のような派生名詞は、基体動詞 (assign) に名詞化接辞 (-ment) が付加されることにより形成されると考えられるが、(11a)の assignment は、Grimshaw (1990)の提案に従って、結果名詞（つまり、動詞由来の派生名詞が語彙化され、普通名詞となったもの）であると仮定すれば、(11a)の assignment は単数形であるので、(8b)の pictures の場合とは対照的に、解釈不可能な ϕ sg を持つことになる。一方、an の ϕ 素性は(8a)と同様に解釈不可能な ϕ sg であるので、an (= Probe) と assignment (= Goal) との間には、 ϕ 素性の同一性に基づく Matching が成立し、an と assignment の解釈不可能な ϕ 素性は Agree によって削除される。その結果、They studied an assignment は文法的であると説明することができる。（なお、派生名詞句の内部構造についてのより詳しい議論に関しては、Radford (2000)および増富 (2004)などを参照。）

(12) They studied [DP an [NP assignment]]



また、(11a)において、that と assignment の共起が許されるという事実についても同様の説明が可能である。

(13) a. that picture/*that pictures

b. *those picture/those pictures

(13)の対比から、指示代名詞の ϕ 素性にも ϕ sg と ϕ pl の区別が存在することが予測され、*that* の持つ ϕ 素性は解釈不可能な ϕ sg であると考えられる。従って、(12)の場合と同様に、*that* と *assignment* との間には *Matching* に基づく *Agree* が成立し、解釈不可能な ϕ 素性が削除されるため、*They studied that assignment* が文法的であることを正しく予測することができる。

(14) They studied [_{DP} *that* [_{NP} *assignment*]]



もしこのような説明が正しいとすると、(5b)で示したような *those* と *pictures* との共起が許されるという事実も自然に説明できる：

(15) a. They studied those assignments. (cf. (5b))

b. They studied [_{DP} *those* [_{NP} *assignments*]]



(15a)においては、*those* と *assignments* の持つ解釈不可能な ϕ 素性が同一（共に ϕ pl）であると考えられるため、(15b)に示すように素性の同一性に基づいて *Agree* が成立し、解釈不可能な ϕ 素性が削除されるため、派生が適正に収束すると説明できる。

以上の議論とは対照的に、(11b)で *an/that* と *assignment* ができないという事実は、(11b)の *assignment* が過程名詞であるという点に原因があると考えられる。Grimshaw (1990)は、(11b)の *assignment* が補部 (*of the problem*) を取っているという点に注目して、このような派生名詞は（基体動詞の項構造を継承する）過程名詞であると主張している。本論文では、(11b)の *assignment* が過程名詞であるという考えを支持し、(11b)において *an/that* と *assignment* との共起が許されないという事実は、(11a)に対する分析をわずかに変更するだけで説明可能であると主張する。

(16) assign + ment $\Rightarrow$ assignment (過程名詞)

no ϕ no ϕ no ϕ

派生名詞についての(16)のような派生が正しいとすると、過程名詞の **assignment** は ϕ 素性を持たないと考えられる。³ すると、(12)、(14)および(15)の結果名詞の場合とは異なり、(11b)においては、解釈不可能な ϕ sgを持つ **an/the** と ϕ 素性を持たない(過程名詞の) **assignment** との間に **Agree** が成立せず、解釈不可能な ϕ 素性が削除されずに残るため非文法的であると説明することができる。

(17) They studied [_{DP} **an/that** [_{NP} **assignment**]]

ϕ sg	no ϕ
×	Agree

以上のように、本論文の提案する分析は派生名詞句と決定詞との共起に関わる経験的事実を正しく予測できる。ただし、このような分析に対しては、派生名詞に関して結果名詞・過程名詞の区別を用いている点で、**Grimshaw (1990)**と同様に記述的な分析であるという指摘がなされる可能性がある。しかしながら、そのような指摘は正しくない。本論文で採用している結果名詞・過程名詞の区別は、単に記述的なものではなく、むしろ派生名詞形成過程の違いの帰結として導かれるものであり、 ϕ 素性の有無についても自然な説明を与えることができる。また、そのような区別以外の仮定を必要とせずに、派生名詞と決定詞との共起の問題を統語操作 (**Agree**) の観点から統一的に説明できるという点は、本分析の利点であると考えられる。

4. 3. 派生名詞句と定冠詞との共起

この節では、(5a, b)および(5d, e)で示した派生名詞と定冠詞 **the** の共起の問題について議論する。

- (18) a. They studied the assignment. (cf. (5a))
 b. They studied the assignments. (cf. (5b))
 c. They observed the assignment of the problem. (cf. (5d))
 d. *The assignments of the problems took a long time. (cf. (5e))

すでに議論したように、assignment が補部を取るかどうかという点から考えると、補部を伴っていない(18a, b)の assignment(s)は結果名詞であり、それぞれ ϕ sg と ϕ pl を持つ。一方、(18c, d)の assignment は補部を取っているため過程名詞であり、 ϕ 素性を持たない。

ここで、定冠詞 the の ϕ 素性について考えておくことにする。

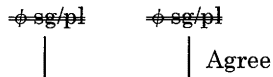
- (19) a. the picture/pictures
 b. the air/water ...

(19)に示すように、一般的な事実として the は加算名詞の単数形・複数形および不加算名詞のいずれとも共起可能である。このような経験的事実に基づけば、the の持つ ϕ 素性は次のように指定できると考えられる：

- (20) a. 加算名詞と共起する場合、the は解釈不可能な ϕ sg/pl を持つ。
 b. 不加算名詞と共起する場合、the は ϕ 素性を持たない。

以上の点から考えると、(18a, b)において the と結果名詞の assignment(s)との共起が可能であるという事実は、次のように説明できる：

- (21) They studied [_{DP} the] [_{NP} assignment(s)].



(20a)により、(21)の the は ϕ sg/pl を持つ。従って、前節の説明と同様に、(21)においては the の ϕ 素性と assignment(s)の ϕ 素性の同一性に基づいて the

(= Probe) と assignment(s) (Goal) との間に Agree が成立し、両者の解釈不可能な ϕ 素性が削除されるため、(18a, b)が文法的であると説明できる。

一方、(18c)の場合は、assignment は過程名詞であるため ϕ 素性を持たず、the についても(20b)により ϕ 素性が指定されないため、本来 Agree が成立する必要はなく、(18c)は文法的であると考えられる：

(22) They observed [_{DP} the [_{NP} assignment of the problem]].

no ϕ no ϕ

なお、(18d)については多少注意が必要である。一見すると、(22)との類似性から、(18d)が文法的であるという予測がなされる可能性がある。しかしながら、そのような予測は誤りである。なぜならば、(18d)の assignment は過程名詞（不加算名詞）であるため、 ϕ 素性を持っていないにもかかわらず、誤って-s (ϕ pl) が指定されている（つまり、複数形になっている）という点で、Agree 以前の問題として非文法的であると考えられるからである。

4. 4. 決定詞を伴わない派生名詞句

最後に、(5c)および(5f)のように、決定詞を伴わない場合の派生名詞句の文法性について議論する。

(23) a. * They studied assignment. (cf. (5c))

b. Assignment of difficult problems always causes problems.

(cf. (5f))

前節までの議論に基づけば、(23a)の assignment は単数形の結果名詞であるので、 ϕ sg を持ち、適正な Probe との間の Agree によって、その ϕ 素性を削除しなければならない。しかし、(23a)の派生においては、assignment と Agree を成立させる Probe が存在せず、解釈不可能な ϕ sg が削除されないため、派生が破綻し、非文法的であると考えられる。⁴ なお、このような事実は加算名詞の単数形は無冠詞で用いることはできないという名詞句に関する

経験的事実 (e.g. *John saw picture.) と並行的である。

(24) *They studied [_{DP} ... assignment].

ϕ sg

これとは対照的に、(23b)の assignment は過程名詞であるため、 ϕ 素性を持たず、本来 Agree による ϕ 素性の削除が必要ではない。従って、名詞句の内部に Probe が存在しない場合でも派生が適正に収束し、(23b)は文法的であると説明できる。

(25) [_{DP} Assignment of difficult problems] always causes problems.

no ϕ

5. 他の構文への拡張：動名詞句における決定詞の分布

本論文の提案する分析は動名詞句における冠詞や指示代名詞などの分布についても説明力を持つことを議論する。具体例を示すと、以下のようである：

(26) a. *[A/That shooting of rabbits] is illegal.

b. [The shooting of rabbits] is illegal.

(Abney (1987), Grimshaw (1990), 鈴木 (2002))

動名詞は、一部の語彙化された例 (building(s)など) を除いて、過程名詞であるとされているので、(26)において、shooting は ϕ 素性を持たない。従って、すでに議論した場合と同様に、(26)の文法性は次のような関係で説明することが可能である：

(27) a. * [_{DP} A/That [_{NP} shooting of rabbits]] is illegal. (= (26a))

ϕ sg/pl	no ϕ	
	×	Agree
└──────────┘		

b. [DP The [NP shooting of rabbits]] is illegal. (= (26b))

no ϕ no ϕ

(27a)においては、shooting が ϕ 素性を持たないため、a/that の持つ解釈不可能な ϕ 素性が削除されず残るため、(26a)は非文法的となる。一方、(27b)では、(20b)により、the と shooting が共に ϕ 素性を持たないため、Agree が成立する必要はなく、(26b)は文法的であると説明できる。

さらに、本論文の分析は次のような事実も説明することができる：

(28) *The shooting rabbits is illegal. (Grimshaw (1990), 鈴木 (2002))

(28)の shooting は、(26b)およびすでに議論した他の事実とは対照的に、the との共起が許されない。このような事実は、(28)と他の派生名詞句との派生の違いを考慮に入れることで、本論文が提案する分析によって予測することが可能である。一般に、(26)のように目的語に of 句を取る動名詞は名詞的動名詞と呼ばれ、(決定詞との共起も含めて)他の過程名詞と同様の統語的ふるまいをすることが観察されている。一方、(28)の動名詞は動詞的動名詞と呼ばれ、直接 (of を伴わず) 目的語を取る (= 目的語に直接対格を付与する) という特徴がある。この点に注目し、(28)の派生の概略を(現在の議論に関係のある限りにおいて)示すと、次のようであると考えられる：

(29) *[DP The [NP shooting [VP Subj [v t_{shoot}] rabbits]]] ...

no ϕ no ϕ ϕ [Case] [Acc]

(28)のような動詞的動名詞の派生においては、目的語に対格を付与するという点から、派生の段階で VP 指定部に Subj が生起しなければならないと考えられるが、このことは Burzio の一般化 (cf. Burzio (1986)) の帰結である。従って、(28)が非文法的であるのは、動名詞句の主語が生起しておらず、結果として、(Burzio の一般化により) 目的語に対格が付与されないためであると考えられる。ただし、仮に動名詞の主語が生起した場合 (e.g. *The John's

shooting rabbits is illegal.) でも、やはり、動詞的動名詞と the との共起は不可能であると考えられる。なぜならば、(29)に示すように、DP の内部には Subj と Agree を成立させ、Subj の解釈不可能な格素性を削除可能な要素が存在しないからである。つまり、すでに議論したように、shooting (過程名詞) と (過程名詞と共起する) the には解釈不可能な ϕ 素性がないため、the や shooting は Subj の解釈不可能な格素性を削除できないということである。

6. まとめ

本論文では、派生名詞句内の決定詞（主に定・不定冠詞と指示代名詞）の分布について、ミニマリスト・プログラムの枠組みで議論した。具体的には、派生名詞句の内部における決定詞と主要部名詞の持つ解釈不可能な ϕ 素性の照合を Agree の観点から議論することで、決定詞と派生名詞の共起に関する文法性が予測できることを示した。なお、議論の過程で、 ϕ 素性に関わる結果名詞と過程名詞との違いを論じ、結果名詞は解釈不可能な ϕ 素性 (ϕ sg/ ϕ pl) を持ち、過程名詞は ϕ 素性を持たないという提案をした。そして、このことは逆に、過程名詞の派生が統語過程における基体動詞と名詞化接辞の結合の結果であるという考えに一定の支持を与えると考えられる。

また、以上のような議論の帰結として、ミニマリスト・プログラムにおいてこれまでほとんど議論されることのなかった名詞句内部での D と N との Agree を仮定することと、Matching に関しても従来の提案よりも厳密に定義することの必要性を示した。

註

1. ミニマリスト・プログラムにおいては、一般に、名詞句 (DP) は解釈可能な ϕ 素性を持つと仮定されている。しかし、本論文では、このような仮定は不十分なものであり、名詞句の内部においても D と N との間で解釈不可能な ϕ 素性についての Agree が適正に成立した結果として、D と N の ϕ 素性に値が付与され、DP 全体の

- φ素性が解釈可能となると主張する。
2. Probe と Goal が共に解釈不可能な φ素性を持つ場合の Agree については、Chomsky (2001: 16) が there 構文の T と there との Agree に関して議論している。
 3. be 動詞と過程名詞との一致の事実 (The assignment of that problem is/*am/*are ...) などを見ると、過程名詞は「人称」に関する φ素性 (「3 人称」) を持っているという可能性があるかもしれない。ただし、本論文の議論において特に問題にならない限り、この点には立ち入らないこととする。
 4. 派生の後の段階で、assignment と主節の vP の主要部 v との間で Agree が成立する可能性がある。しかし、*John saw picture. など一般的な事実も考慮すると、v と NP 主要部との Agree は成立していないと考えられる。従って、表層構造において決定詞の存在しないように見える名詞句には、音形を持たず、φ素性を持たない要素が DP の主要部に生起しており、大庭 (1999) などが指摘するように DP がフェーズであると仮定すると、DP 内で φ素性が Agree によって削除されない(23a) のような例は、v との Agree も Chomsky (2001) の提案する Phase Impenetrability Condition (PIC) により阻止され、非文法的であると説明することができる。

参考文献

- Abney, S. P. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Burzio, R. (1986) *Italian Syntax*, Dordrecht: Reidel.
- Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," In *Step by Step: Essay on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, eds. by R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Karimi, S. (1999) "Specificity Effect: Evidence from Persian," *The Linguistic*

Review. 16, 125-141.

増富和浩 (2004) 「英語名詞句からの要素の取り出しと特定性」『九大英文学』47, 137-155, 九州大学大学院 英語学・英文学研究会.

大庭幸男 (1999) 「Phase としての名詞句表現」『言語研究の潮流—山本和之教授退官記念論文集一』21-36, 東京: 開拓社.

大庭幸男 (2005) 「特定性効果とフェイズ不可侵条件」『市河賞 36 年の軌跡』語学教育研究所編, 202-210, 東京: 開拓社.

Radford, A. (2000) “NP-shells,” *Essex Research Reports in Linguistics* 33, 2-20.

鈴木 亨 (2002) 「動名詞と派生名詞」『英語の主要構文』中村 捷・金子義明編, 東京: 研究社.